人物みのかも ❹

近代農村歌舞伎の指導者

——小森勘弥

明治二十年代から昭和初期まで、加茂地方から恵那地方にかけて、東濃では時期によって多少の盛衰はあっても、民衆による芝居（歌舞伎）熱が盛んであった。

この農村歌舞伎の指導者で、明治末期から昭和初頭まで、東濃地方の振付師匠（演出家）であり、座頭（ざがしら）であったのが、小森勘弥である。

勘弥は文久三年（一八六三）七月二十六日、山之上村金谷の農家に生まれた。少年時代は家にあって農事に励んでいたが、たまたま獅子芝居の舞台に出て、その達者な芸で評判をとった。やがて志を立てた彼は、五世市川小団次の門に入り、苦しい修業を積んだ。

ある日、師匠が進境著しい勘弥の芸に目をつけて、次の興行ではお前によい役をつけて舞台に出してやるといっていたが、たまたま隣家から火が出て類焼してしまったので、折角のチャンスをつぶしてしまったという。

郷里に帰った勘弥は、市川左田五郎の名披露を行い、ついで市川左喜太郎を襲名して、地方劇団を率いたり、素人芝居の指導に当ったりした。

左喜太郎は恰幅もよく、芸も大きくて、忠臣蔵の由良之助、義経千本桜のいがみの権太や知盛、熊谷陣屋の真実、勘進帳の弁慶、太功記十段目の光秀など、荒事が得意で、ファンも多かった。昭和のはじめ、加茂野や川辺で興行した時も、三日間大入満員札留めの大盛況であった。

略歴➡文久3年（1863）山之上村に生まれる。18才のときたまたま獅子芝居の舞台に出てその達者な芸で評判を取り、のち上京して、市川小団次のもとで修業を積む。その後、帰郷して市川左喜太郎と襲名し、農村歌舞伎の指導にあたった。昭和18年没、享年80才。

県の重要民俗文化財に指定されている各務原の村国座や、下呂の門和佐の白雲座、深萱の十二社神社の拝殿舞台なども、彼の活躍の場であった。

また、素人芝居の指導に頼まれて、中・東濃から遠く飛騨地方まで出張し、出演者の家に二十日間も泊りこんで指導に当った。彼の指導はなかなか上手で、「教えてもらうにはこの人が一番」と評判をとった。

彼は二宮尊徳を尊敬し、生活は質素で勤勉で、決しておごりたかぶるところがなかった。年中ほとんど旅に出て、家に帰ったのは僅か一か月ぐらいであったが、帰るとすぐに野良着に着かえて、家族と共に畑仕事に打ちこんだ。

また、至って信仰心が厚く、毎日心経を欠かさなかったという。

昭和十年には発起人となって五百円を寄付し、それを基金に石仏を刻み、西禅寺をはじめ、村内八十八か所に建立して、村民の繁栄と安全を祈った。

彼はまた酒が大好きであった。日に一升を欠かさなかったというが、決して乱れることがなかった。ある晩、青年団の祝い事に招かれたとき、乞われて浄瑠璃の一節をうなり、珍しく酔って上気嫌であったので、青年たちは「勘弥さがこんなに酔っぱらったのを初めて見た」といって喜んだ。団員で同席していた孫の恭二氏が、帰途心配して声をかけると「俺は酔っとりゃせん。招いてくれた青年への礼儀として酔ったふりをしたのだ。」といって笑ったという。

西禅寺に建てられた石仏

しかし、その好きな酒のために彼は戦時中、脳出血で倒れてしまった。だが「俺は二度と中気にかからんように、死ぬまで酒を飲む」と豪語して、三日に一升の割合で酒を飲んだ、芝居の弟子で尾上多賀太郎の芸名を持つ、福地酒店の主人が、せっせと酒を運んだ。

昭和十八年八月七日、にわかに病状あらたまり、末期の水の代わりにふくませた酒を口にしたまま、にっこり笑って大往生をとげた。

彼の没後、芝居の台本や衣裳などの遺品は、ほとんど散逸したが、一部は岐阜大学教育学部の郷土博物館に収納されている。

長年、美濃加茂市の歴史、文化財研究にご尽力をくださいました神保朔郎先生は、この原稿を最後に永眠されました。先生のご冥福をお祈りいたします。